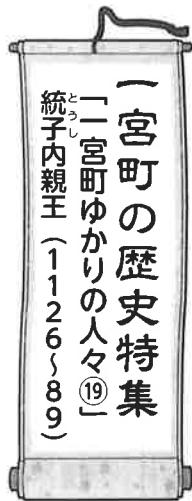


令和2年4月号



かつて一宮地域には、中世にかけて玉前神社を中心として「一宮(玉前・崎庄)」と呼ばれる庄園がありました。この一宮庄の範囲は資料から読み解くと現在の一宮町全体から西は睦沢町の旧土睦村地域、南はいすみ市の椎木地域、北は長生村・白子町の大部分に広がり、一部茂原市にまで広がっていたようです。

では、一宮庄の名前が見られるのはいつごろからでしょうか。現在のところ、平安時代末頃の資料である「宣陽門院親子内親王所領目録」(「島田文書」所収)という古文書にその記載が見られるのが初見のようです。この古文書には「上西門院」という人物から宣陽門院に新たに与えられた所領として、「上総国玉崎庄」の記載があります。

上西門院とは誰でしょうか。これは院号と呼ばれるものであり、統子内親王のことを指します(上西門院の名称の方が著名なので、ここではこの名称を使います)。上西門院は平安時代の皇族で、鳥羽天皇(1103〜56)の第2皇女です。大治元年(1126)に内親王宣下され、保元

4年(1159)に院号宣下、永暦元年(1160)に出家し、文治元年(1189)に64歳で崩御しました。一部の記録によれば、幼少時から並ぶ者のない美貌の女性だったといえます。

この古文書から、玉前(崎)庄は元々上西門院の所領であり、それが宣陽門院に譲られたことがわかります。

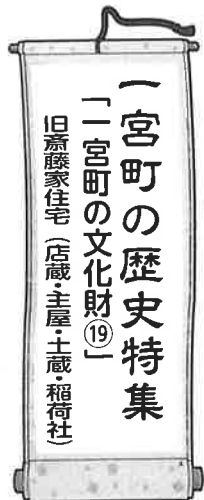
上西門院にしても宣陽門院にしても彼女たちが一宮に来た可能性は限りなくゼロに近いでしょう。あくまでも皇族の庄園(私有地)という面が大きいと思われる。しかし、このような古文書に記録があることで、私達は郷土の歴史の古さを知ることができるのです。



▲一宮庄の範囲(『中世の一宮』一宮町教育委員会、2004年)より

【問合せ】
教育課 ☎(42)1416
(教育委員会 江澤一樹)

令和2年5月号



国道128号線沿いに店蔵を構える旧齋藤家住宅。現在はカフェやレンタルスペースとして活用されています。

齋藤家は、明治時代以降、鯉節を中心とした海産物問屋を営んでいました。幕末の齋藤長兵衛は一宮本郷村(現一宮町字一宮の一部)の村役人をつとめ、明治初期には戸長もつとめています。次代の孝祐は町会議員をつとめ、加納久宜町長時代の一宮町政を支えています。

店蔵と主屋は連結しており、土蔵は経年劣化が激しいため、現在はトタンで覆われています。稲荷社は龍の彫刻が施されており、刻銘から現在のいすみ市の彫工・長谷川三之輔の作品であることがわかっています。

これらの建物はいずれも明治30年(1897)頃の建築と推定されています。

旧齋藤家住宅の店蔵・主屋・土蔵・稲荷社の4件は平成28年6月に国の登録有形文化財に登録されています。

なお、この家からは平成26年、令和元年の2回に渡り大量の古文書が発見されています。江戸時代から昭和時代初期にかけての貴重な資料群であり、

一宮の歴史を語る、重要な文化遺産です。



▲店蔵(背後に主屋が連結)



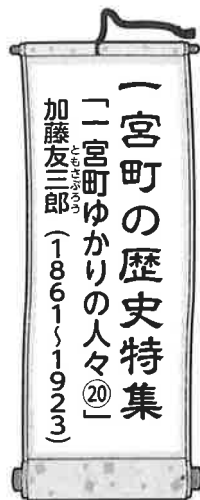
▲土蔵



▲稲荷社

【問合せ】
教育課 ☎(42)1416
(教育委員会 江澤一樹)

令和2年6月号



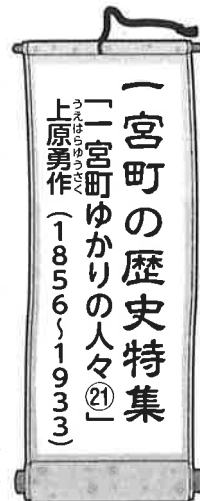
加藤友三郎は現在の広島県出身の海軍軍人・政治家です。海軍軍人としては日清戦争、日露戦争で活躍し、大正4年(1915)には第二次大隈重信内閣の海軍大臣に就任、以後三代の内閣に渡り、大臣として活躍しました。

大正10年(1921)に開催されたワシントン軍縮会議には日本首席全権委員として出席。軍備縮小に積極的に賛成したことから、各国から称揚されたといえます。

翌年6月、海軍大臣を兼任したまま、内閣総理大臣に就任。総理大臣としてはシベリア撤兵を完遂、陸軍の軍縮(当時の陸軍大臣であった山梨半造の名前から「山梨軍縮」とよばれる)を推進したほか、対外的には協調外交を進めました。

在職中の大正12年(1923)に死去。享年63歳。

加藤は現在の一宮町新地に別荘を有しており、現在その場所には石碑が建てられています。



上原勇作は宮崎県出身の陸軍軍人で、父は鹿児島藩士でした。日清・日露戦争で活躍し、日本陸軍の最高幹部職である陸軍大臣・教育總監・参謀総長の「陸軍三長官」を歴任した人物です。

明治45年(1912)に第二次西園寺公望内閣の陸軍大臣に就任。陸軍二個師団増設案が拒否されると大臣を辞任、陸軍は後任を出さず、軍部大臣現役武官制(軍部の大臣を現役の大將・中将に限定する制度)を利用して西園寺内閣を総辞職に追い込みました。

昭和8年(1933)に東京品川の本邸で77歳で死去。

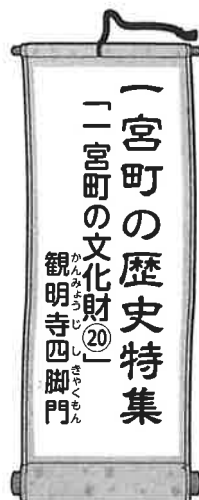
一宮に別荘を有していた軍人の一人で、一宮海岸の台場跡の高台に別荘を構えていました。現在その場所には石碑が建てられています。

加納家との交流もあつた人物のようで、一宮に別荘を構えたのは加納久宣が関与していたようです。

(教育委員会 江澤一樹)

【問合せ】教育課 ☎(42)1416

令和2年7月号



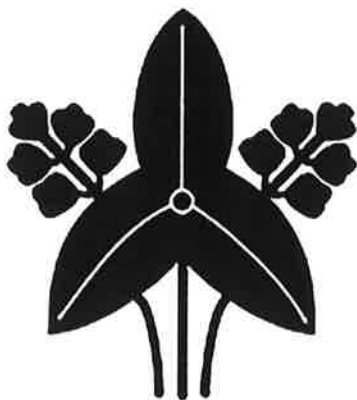
観明寺の四脚門は町内に残る最古の建造物といわれ、昭和52年(1977)に町の指定文化財に指定されています。

観明寺は天台宗の寺院で天平6年(734)に行基(668~749)によつて開山され、慈覚大師(794~864)の中興と伝えられています。明治時代初期頃まで、玉前神社の別当寺の地位にありました。

四脚門は切妻造で屋根はかつては茅葺であったといいますが、現在は茅葺型式の銅板屋根となっています。正確な建立年代は不明ですが、正面の臺段に堀氏の「沢瀉紋」の家紋があることから、江戸時代初期頃と考えられます。

堀氏は寛文十二年(1672)から約30年間、一宮本郷村(現在の一宮町字一宮の大部分)を治めており、この山門は堀氏の寄進によるものとも言われています。

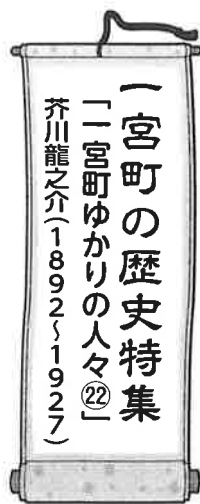
平成25年(2013)に修復工事が行われ、現在地に移設されました。



▲ 立ち沢瀉紋

【問合せ】教育課 ☎(42)1416 (教育委員会 江澤一樹)

令和2年8月号



芥川龍之介は明治25年(1892)、現在の東京都中央区に生まれました。大正から昭和初期にかけて小説家として活躍し、『羅生門』『鼻』『藪の中』『地獄変』『蜘蛛の糸』など多くの代表作があります。

芥川は大正3年(1914)と大正5年(1916)の2度、一宮を訪れ、2度目の際に一宮館の離れに滞在しました。現在この建物は「芥川荘」と呼ばれ、国の登録有形文化財となっています。2度目の滞在の際にはここからのちに妻となる塚本文に求婚の手紙を送っていることから、写真のような「芥川龍之介愛の碑」が建てられています(昭和49年建立)。

芥川が一宮に来るきっかけは、一高(現在の東京大学教養学部等の前身)時代の一年先輩である堀内利器に誘われてのものといえます。利器は一宮藩士であった堀内家の出身です。利器の故郷であり、別荘地・避暑地として栄えていた一宮に、涼を求めて訪れた、

というところでしょうか。1度目の来訪は堀内と共に町家に滞在し、毎日海水浴に出かけたといえます。

2度目は友人で、のちに小説家・劇作家として活躍する久米正雄(1891~1952)とともに来訪、大正5年8月17日から9月2日まで、先述したように芥川荘に滞在しました。

なお、現在、東京都北区では、田端にある芥川の旧居跡に「(仮称)芥川龍之介記念館」を建設する計画が進んでいます。計画が進むことで、資料が新発見され、研究が進むことが期待されます。



▲ 芥川龍之介愛の碑 (一宮海岸広場 船頭給 2512-81)

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416 (教育委員会 江澤一樹)

令和2年9月号



北沢楽天(1876~1955)は 絵画記者として活躍し、日本初の職業漫画家といわれている人物です。詳細なプロフィール等については平成28年12月号の当コラムにて取り上げていますのでご覧ください。

今回紹介する絵馬は南宮神社に大正5年(1916)に奉納された絵馬です。縦87センチ、横156センチの大きさで平成15年(2003)に町の指定文化財に指定されています。

楽天は現在の白山地域(白山11付近、現在は石碑が建っています)に別荘を有していました。大正5年7月30日、折から続いた大雨の影響で一宮川の宮原付近の堤防が決壊、周辺の耕地はあらわれ、家2軒が流され、家3軒が傾きましたが、幸い人的被害等はありませんでした(宮原の大水害)。楽天の別荘も1階部分は水没し、楽天の家族は2階に避難したといえます。周辺の人々は船で南宮神社に避難しました。

この絵馬はその際に流された北沢邸の門扉の中で残った1枚に描かれています。

「神威顕現」と題され、水魔克服の鎮守の神が描かれています。絵馬には楽天の「祈り」が込められているのです。

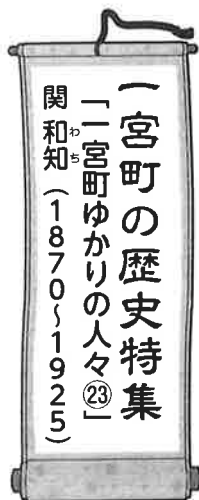
近年は日本各地で自然災害が多発しています。昨年は一宮川上流での水害も発生しました。この絵馬は宮原堤防付近にある堤防復旧の記念碑(楽天別荘跡地石碑に隣接)とともに、宮原の大水害を今に伝える、貴重な文化財となっています。



▲ 南宮神社の楽天の絵馬 (通常非公開)

【問合せ】 教育課 ☎(42)1416 (教育委員会 江澤一樹)

令和2年10月号



関和知は長生郡東浪見村（現在の一宮町）網田出身の政治家です。

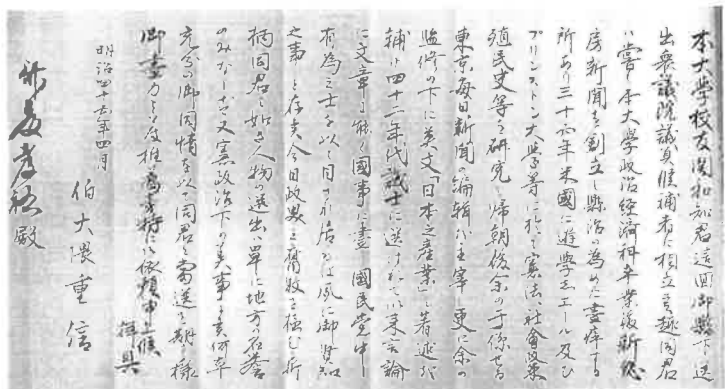
明治28年（1895）に東京専門学校（現早稲田大学）の邦語政治科を卒業。地元に戻って立憲改進党機関紙の記者となりましたが、廃刊したため、『新総房』という新聞を自ら創刊しました。

明治35年（1902）から4年間アメリカ合衆国に留学。帰国後は『萬朝報』（日刊、日本におけるゴシップ報道の先駆けといわれる、昭和15年廃刊）の記者となり、その後『東京毎日新聞』（日本初の日刊紙、昭和15年廃刊）の編集長となりました。

明治42年（1909）衆議院の補欠選挙に当選、以降7回にわたり当選を重ねました。議員在任中は内務大臣秘書官などを歴任し、大正13年（1924）に加藤高明内閣が成立した時には陸軍政務次官（大臣等に次ぐ地位）に就きました。

近年の古文書調査で、関和知の書簡や選挙に関する資料が少しですが見

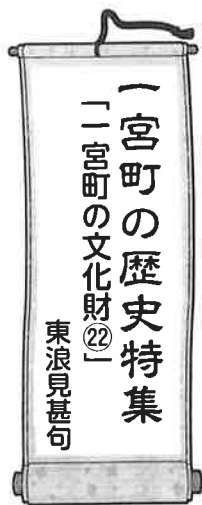
つかっています。写真の資料はそのうちのひとつで、明治45年（1912）の衆議院選挙に際しての大隈重信（1838~1922、首相他）の推薦状（印刷）です。この他にもこの時の選挙のものはわかりませんが、読み込みの資料も見つかっており、関と地域との関係性をうかがい知ることができます。



▲大隈重信推薦状
（旧齋藤家文書第2次調査）C63-7

【問合せ】教育課 (学芸員 江澤一樹)
☎(42)1416

令和2年11月号



東浪見甚句は昭和40年（1965）に県指定無形民俗文化財に指定されています。

九十九里沿岸では、江戸時代から昭和30年代頃まで地引網漁が盛んに行われていました。この東浪見甚句は古くから伝わる民謡の一つで、かつては大漁祝いの席で、海の安全と次の豊漁を祈って歌われていました。昭和38年（1963）に保存会が作られ、現在も歌と踊りが伝えられています。東浪見地区の釣区集会所（東浪見75-1）近くには下のような記念碑が建てられています。今年6月には石碑の案内板にQRコードがつけられ、東浪見甚句を聞くことができます。

現在では毎年玉前神社門前で行われるさすが市で保存会により披露されます。また、東浪見小学校の授業の一環として踊りが伝承されており、例年10月末の町芸能音楽祭で発表されています。今年は新型コロナウイルスの影響で中止となりましたが、来年以降開催された折にはぜひご覧ください。

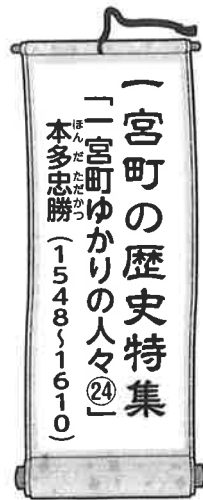
【問合せ】教育課 (学芸員 江澤一樹)
☎(42)1416

東浪見甚句が聞けます

左のQRコードを携帯電話で読み取り、アクセスしていただくことで、東浪見甚句を聞くことができます。



令和2年12月号



本多忠勝は三河国(現愛知県)出身の戦国武将です。徳川家康に仕え、数々の戦功を重ね、徳川四天王の一人に名を連ねています。生涯50数度の戦でかすり傷一つ負わなかったと伝えられています。

天正18年(1590)、豊臣秀吉による相模国小田原城(神奈川県小田原市)の後北条氏攻めが行われ、後北条氏が滅亡すると、関東の大部分は徳川氏に与えられます。忠勝は上総国に10万石を与えられ、初めは万喜城(いすみ市)、のちに小田喜城(現大多喜城)に入りました。この際一宮地域も本多氏の領国に組み込まれたとみられます。

忠勝は慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いの功績により伊勢国(現三重県)桑名(10万石)へ転封、大多喜は忠勝の次男の忠朝(1582~1615)に別家として5万石を与えられます。なお関ヶ原の戦いに参加した本多軍には新笈村(現一宮町字下村周辺)から5名が参陣したといわれています(『一宮町史』1964年より)。

忠朝時代にはどうやら一宮地域は本多氏の支配から外れたようです。そのち元和3年(1617)には一宮地域は信濃国(現長野県)飯田藩の脇坂氏の領地に組み込まれています。

なお本多忠朝は慶長20年(1615)の大坂夏の陣で奮戦し、討ち死にしています。

写真の古文書は「岩沼高浜方塩浜置場帳写」(町指定文化財・個人所蔵・非公開)という資料です。慶長6年の検地の際に大多喜藩に370石の不足があり、これを補うために領内沿岸の村々に塩年貢が割り付けられました。これを「浜方」といい、岩沼村(現長生村)に役所が置かれ年貢米を取り扱っていたため「岩沼高」と呼ばれています。この村々の中には現一宮町域の村々も含まれており、本多家と一宮の関係を示す貴重な資料です。



【問合せ】教育課 ☎(42)1416 (学芸員 江澤一樹)

令和3年1月号



高藤山城は睦沢町との境の山間部にある山城で、標高約80mの天然の要害です。高塔城とも呼ばれます。

この城は平安末期の豪族・上総広常の居城跡と伝わっていますが、実際のところは不明です。広常居城跡としては睦沢町やいすみ市にその伝承が残っています。高藤山城には戦国時代末期の構造がみられることや広常の時代の居館と考えると、居館があったとするならば城の麓であろうと考えられます。

山頂には広常の業績を後世に残そうと、文久2年(1862)に時の一宮藩主・加納久徴(1813~64)が建てた「古蹟の碑」があります。城址と石碑は昭和53年(1978)に町の史跡に指定されています。

戦国時代の構造の城、と述べましたが実はその頃の城主等は分かっています。広常の末裔だという金田氏が住んだという「岩井城」がこの城であると比定する見方もあります。

享保11年(1726)の絵図には「正木左近大輔」「鶴見甲斐守」が城主

だったと記されています。この両者は一宮城の城主だったとみられる人物です。一宮城は発掘調査の結果火災にあっている(おそらく1560年代)ことがわかっており、火災後はどうやら使用されなかったらしいことが指摘されています(『中世の一宮』2004年)。

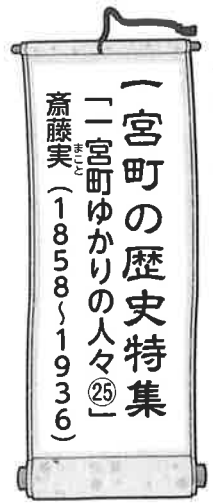
戦国時代中期までの一宮城が現在の一宮城で、戦国時代末期の一宮城は高藤山城を指していた可能性も捨てきれないと思います。あくまでもこれは私見ですが、今後新しい発見があることで、少しづつ真実に近づけるのではないかと、と期待しています。



▲ 東側から見た高藤山城址

【問合せ】教育課 ☎(42)1416 (学芸員 江澤一樹)

令和3年2月号



齋藤実(まこと)は現在の岩手県出身の海軍軍人、政治家です。明治39年(1906)から約8年間海軍大臣をつとめ、大正8年(1919)には第3代朝鮮総督に就任します。現役的首相であった犬養毅(いぬかいぎ)が暗殺された昭和7年(1932)の五・一五事件直後に内閣総理大臣に就任、約2年間首相の座にありました。首相在任中には国際連盟の脱退を日本政府として表明(昭和8年)するなど激動の時代を生きました。

昭和11年(1936)2月26日、陸軍中堅・青年将校らが起こしたクーデター未遂事件(二・二六事件)によって暗殺されます。享年77歳。

齋藤は一宮の新天地に別荘を有しており、大正3年(1914)に海軍大臣を辞してからは1年間の大半をこの別荘で過ごしたといえます。

ちなみに暗殺される前夜の昭和11年2月25日、齋藤はアメリカ大使公邸でジョセフ・ブルー駐日大使と夕食をともにし、トーカー(発声映画)を鑑賞しています。途中で退席して別荘に行く予定でしたが、結局最後まで映画を

鑑賞して夜遅くに帰宅、別荘行きを翌日にしたといえます(ブルー『滞日十年』)。

この別荘は一宮の別荘のことだったと考えられています。歴史に「F」はありませんが、もし予定通りの行動をとっていたら、難を逃れており、歴史が少し変わっていたかもしれせん。



▲ 齋藤実扁額「神威赫赫」(昭和10年、玉前神社所蔵)

【問合せ】

教育課

(学芸員 江澤一樹)
☎(42)1416

令和3年3月号



平成23年(2011)3月11日の東日本大震災から10年。東北地方を中心に甚大な被害をもたらした一宮にも津波が襲来したことは記憶に新しいと思います。地震・津波災害に関する一宮の文化財は「延宝の津波供養塔(町指定史跡、平成28年11月号の本コラムで紹介)」などありますが、今回は東浪見地区の「浪切地蔵」(東浪見1670-1付近)を紹介します。

浪切地蔵は国道128号沿いにあります。海岸からは約1.5kmほどの位置です。この地蔵の由来は詳しい記録がないためよくわかりませんが、2種類の言い伝えがあるといわれています。上総一宮郷土史研究会の「ふるさと」(1981年)によると、

(1)江戸時代、九十九里地域は延宝・元禄と2回の大津波があり大きな被害が出た。村人たちはこの記憶を後世に残すために津波が到達した場所にこの地蔵を建てた。

(2)この地蔵は津波以前から建てられていて村人の信仰が厚かった。そのため、津波もこの地蔵のところにとまった。これは地蔵の加護によるものであるとし、それからは「浪切地蔵」と呼ぶようになった。このようにこの地蔵は津波の前後に

存在したか否かという正反対の伝承が残っています。今となってはどちらが正しいのかはわかりませんが、いずれにせよ、津波と大きな関わりのある地蔵といえるでしょう。

ちなみに以前は右の写真のように首なしの地蔵でしたが、現在は左の写真のように整備されています。首なしの地蔵は現在の地蔵の内部にあり、過去の津波の記憶を今に伝えています。



▲ 昭和50年代の浪切地蔵
(「ふるさと」(上総一宮郷土史研究会、1981年)より)



▲ 現在の浪切地蔵

【問合せ】

教育課

(学芸員 江澤一樹)
☎(42)1416